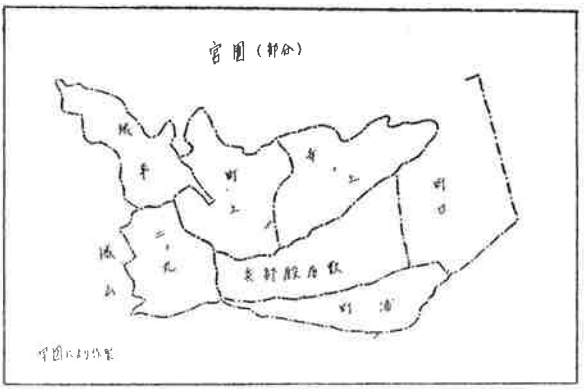
中世末における城下集落の発生

染矢多喜男

中世末の戦国時代になれば、各地の有力な戦国大名によつて城下町が形成されたことはよく知られており、豊後においても大友氏の城下町として府内が繁栄している。しかし、ここにとりあげようとしているのは、そういつた有力大名の著名な城下町ではない。いわば名も知れない土豪の城下の小集落である。城下町と呼ぶには余りにも貧弱な小集落であり、近世城下町の卵ともいうべきものである。おそらく中世末には、このような城下町集落が数多く発生したことと思うが、その殆んどは城主である土豪と運命を共にし、少数の例外を除いては消え去つたものと考える。城下以外に他の有利な条件を持つていたものは近世以後に発展しえたであろうが、大多数はかつて城下集落の形成された痕跡も止めず、人々の関心を惹きえなかつたであろう。しかし、運よく地名にその手掛りを求めうる例が二カ所あるので、脚光をあててみよう。同一大字内に城や町の付く小字名がともに存在している例として、下毛郡耶馬溪村大字宮園と宇佐郡院内町大字副がある。

まず、宮園について記そう。この大字には九十二の小字があるが、この中注目すべき小字名は「城山」・「二の丸」・「兵部殿屋敷」・「町口」・「町浦」・「町上」である。「城山」・「城平」・「二の丸」は城砦に、「兵部殿屋敷」は土豪屋敷に、「町口」・「町浦」・「町上」は市街的集落である町に起源を持つと考えられるからである。字図によつてこれらの小字の位置関係（別図参照）を調べたところ、全部一戸部落に集中して接続していた。そして「兵部殿屋敷」を「町上」・「町口」・「町浦」が囲んでいることから、「兵部殿屋敷」が町にあたることが分り、町は「城山」の城下集落として形成されたと考えられる。ところでこの「城山」はいつ頃、誰を城主としていたものであろうか。「城山」を村人は一戸城と呼んでいるので

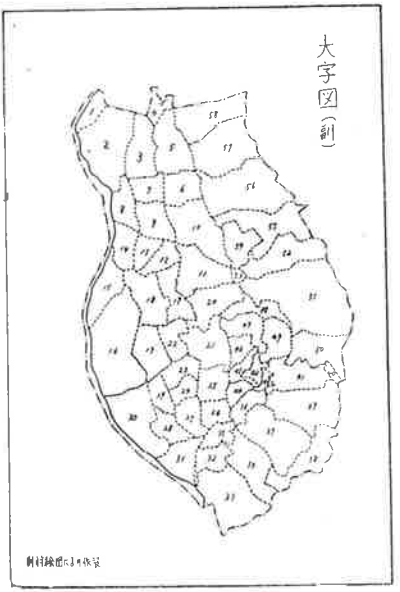


豐前志に記す一戸城址であることは疑いなかろう。同志によれば「慶長の頃、荒川少兵衛和光居りき。細川家臣なり」とあるが、下毛郡誌には「此の城始め宇都宮の支族一戸氏居る。一戸氏天正の頃は同族野中家に属し、天正七年鎮兼反せし時は一戸与市この城に在りて日田を守る」とあり、本来は一戸氏の居城であつたようである。そしてこの城は単に小領主の城砦というよりは、その地理的位置から考えれば、大友氏に激しく抗し続けていた野中氏の外郭防衛の一拠点であつたと思う。もし山国川上流の小峡谷の一領主であつた一戸氏の城砦であるならば、峡谷の中程に城砦とする山を選ぶことができるのに、「城山」の位置は山国町との境で、著しく日田側に偏しており、日田―中津を結ぶ交通路を扼する位置にある。そしてこのような推測を証する記事を大宇佐郡史論に見出すことができた。すなわち、耳川敗戦後、野中氏が大友氏に叛旗をひるがえした時に麻生口（屋形掃部）・玖珠口（山移馬場）とともに日田口を一戸与市に固めさせていることである。後に細川氏が領主となつた時、荒川少兵衛に守らせたのも同様な越旨によるものと思う。以上のように、この小さな城砦でも外郭防衛の役割を持ち、またいつ敵の奇襲を受けるか分らない戦国動乱の時代であれば、一戸氏固有の兵力の外に何がしかの援兵の派遣・駐屯が考えられる。また、山間の峡谷では海岸平野の産物との交換の必要性も大きく、市あるいは町の形成の要因は存在するとみて差支えあるまい。ただし、この城下集落が一戸氏時代に形成されたのか、細川氏時代なのかは疑問として残る。この問題の解決の鍵は、「兵部殿屋敷」に名を残す兵部が何れの時代に属するかという点である。もし兵部が一戸氏であるならば、ここに屋敷を構え、一戸城と呼ばれる「城山」を城砦として持つていたわけで、町は兵部及び彼の家臣の屋敷と若干の町家を加えた程度のものであろう。兵部が細川氏の家臣で、一戸城主として派遣されたものならば、元来町を形成していたこの地に屋敷を構えたために、町

は「兵部殿屋敷」と呼ばれるようになり、「町上」・「町口」・「町浦」のみが残つたものとも考えられる。また可能性は少ないが、一戸城が放棄された後、「兵部殿屋敷」に駐屯していた武家の屋敷跡を利用して、町が形成されたと考えられないこともない。兵部の時代や系譜を明らかにしえないけれども、第一の推測が最も適当なのではないかと思つている。「兵部殿屋敷」がそれほど大きな面積を持つているわけではないし、近世の城下町と違つて中世のそれは小規模であり、武家町と町人町との区別もなかつたであろう。

「副」字名表

1	鶴	㉑	城ノ下	41	柞ノ木
2	下ノ原	22	上ノ出口	42	宇戸
3	五藤	23	古四毛	43	仏本
4	流	㉔	園田	44	野末
5	伏原	25	八反田	45	衿田
6	善福寺	26	上ケ田	46	入道迫
7	塚田	27	大石ノ本	47	地福寺
8	野尻	28	堂ノ本	48	辰ケ迫
9	楠	29	井ノ上	49	塔ノ仲
10	宮田	㉚	殿屋敷	50	白岩
11	中床	31	荒瀬	51	穴田
12	巣崎	㉜	桜馬場	52	美ノ草
13	口ノ田	㉝	城山	53	折立
⑭	大鍛冶屋	34	宮坂	54	丸尾
15	川鶴	㉟	射場ノ元	55	大明神
16	別府	36	堂田	56	栗迫
17	西ノ園	37	元宮	57	姥石
⑱	町	38	中床屋敷	58	才ケ迫
⑲	市ノ東	39	大池ノ平		
20	長迫	40	土橋		



副では、「城山」・「城ノ下」・「殿屋敷」・「町」・「市ノ東」という字名があげられる。関係位置（大字図参照）は宮園の場合ほどには接続していない。「城山」は平地面より三〇～四〇米程度の小高い丘であるが、西側は駅館川によつて侵蝕され断崖をなしている。丘上は狭いが平坦にならされ、斜面には内、外二重の空濠を廻らした小城砦である。「城ノ下」は「城山」から離れすぎているので、「城山」とは関係がなさそうである。「殿屋敷」は旧東院内役場から郵便局までの広い面積を占め殆んど平坦で、西側は駅館川の侵蝕により二〇～三〇米の断崖である。「町」は現在副部落になつている。町家はなく殆んど農家である。「市ノ東」が「町」に東接しているので、「町」には市が立つていたと想像されるが、市の立つた記憶はない。エビス祠は河野政一氏宅に奉祀してある。百年位前に祖父が他所から移したという。他所が部落内か他部落かは不明である。終戦前まで、十二月十二日の夜、家毎にお灯明やオゴクを祠に供え、十三日には河野氏宅で神官を呼んで祭り、終つてから四つのデイー（土居）に分れて酒盛りをしていたという。このエビスが市神か農耕神かは不明である。近世初頭、細川氏が豊前を領有した時、宇佐郡の市を全部龍王（安心院町）に集めたというから（拙著「地名覚書」参照）、江戸時代には開市されなかつたかも知れない。この外に「桜馬場」・「射場元」が「城山」の北麓にあるが、副神社の麓にもなるので、練武場であつたと断定はできまい。以上が各字の現状の概要であるが、次に「城山」の城主について記そう。

大宇佐郡史論によれば、「城山」は副氏が戦国時代に居城とした上副城址である。副氏は但馬国出石城主であつたが、天文の頃越中守という人が宇佐郡に来て黒水に居り、後に副村に移り城を築き、副氏を称したという。また一説には、出石城主副甲斐守が流浪して九州に下り、田原紹忍を頼み副村に住んだともいう。しかし、副部落の覚正寺（速見郡日出町豊岡）院内支

坊にある六地蔵は大永二年の銘があり、副大和守の名が記されてある。そうすれば、副氏が天文の頃この地に移住したというのはおかしいことになる。わが国では地名を苗字にするのが慣例であるから、副氏以前に副を名乗る土豪が存在していたであろう。そして副越中守または甲斐守は入婿等の婚姻形式を通じて、副氏を名乗つたのではないかと思う。あるいは後に記す小山大和守が副大和守にあたるかも知れない。副氏の起源と同様にその滅亡も大宇佐郡史論では混乱している。副但馬守宗澄は天正九年大友氏に叛いて、田原紹忍に滅ぼされたというが、上副城址の碑文（後代に建つ）では、弘治二年に死んだことになつている。弘治二年は大友氏が豊前をその支配下に収めた年であり、天正九年は耳川の敗戦を機として、大友配下の諸領主が各地に叛乱を起し、その収拾に大友氏が苦労していた頃であり、両者には約二十五年の開きがある。「射場元」に光善寺（覚正寺末）がある。弘治三年善城によつて創建されたという外は不明であつたが、副氏の菩提寺と伝えられるから同氏と密接な関係があつたと思う。光善寺をもつと詳細に調べることができれば、副氏について明らかにできたと思うが果しえなかつた。しかし、いずれにしろ副氏が上副城主であり、戦国末に大反氏によつて滅ぼされたと考えてよかろう。

次に上副城主副氏の館址について考えてみよう。大宇佐郡史論は上副城址の北麓にありとしているが、その可能性は十分ある。「射場元」の光善寺付近からは多数のグリン（五輪塔）が出土するから、「射場元」にあつたと思える。そして同書は家老屋敷址があり、鐘や古刀を掘り出したと記すが、場所については何も触れていないけれども、「殿屋敷」を指しているのではないかと考える。「殿屋敷」の一画には相当な武士の屋敷跡ではないかと思われる所がある。それは郵便局の西側に堀跡と考えられる狭長な水田に囲まれた土地で、二ケ所にグリンの残骸が積まれてある。しかし「殿屋敷」を家老屋敷址と断定する材料はない。「殿屋敷」は〇〇殿屋敷の略されたものであるが、此の地で〇〇殿といえば城主副氏をまず指すであろうから、「殿屋敷」が副氏の館址である可能性も大きい。しかし、近世城下町における殿町が武家町の呼称であつたように、殿屋敷は小規模な武家集落を指したとも考えられ、町人集落の「町」に対して武家集落の「殿屋敷」の意ともとりうる。殿屋敷がそのような意味を持つならば、副氏が家臣団をその城下に集住させうる程の領域を支配したかどうかを考えてみる必要がある。

この点を考える前に、宇佐郡における当時の特殊性を明らかにしておきたい。豊後では、守護の大友氏が鎌倉時代以来の荘園侵略・土豪の被官化を通じて、一円知行化を進展させ、豊筑へ勢力を拡大していた。ところが、豊前では、大荘園領主であつた宇佐神宮の古代的支配は崩壊し、「宇佐三十六人衆」と呼ばれる小土豪が独立性を高めていた。大友興廃記によれば「宇佐郡には三十六人の侍あり。右何れも郡郷を古来より領して、僅に公方の運送をつとむるより外は主を持たず。或は恣に威を振ひ、或は郷庄の堺を論じ、相論を取り結ぶもあり」という状態であつた。副氏の支配領域を明確にする資料を持たないが、三十六人衆の所在地より考えて、二日市より山城に至る副谷ではなかつたかと推測する。一郡を三十六人で分割支配しているために、その兵力はさして大きなものではなかつたであろう。天正七年大友氏が日向へ侵攻した時を例にとれば、「豊前宇佐郡三十六人の武士、其勢一千百余」（大友興廃記）である。恐らく全兵力を動員はしていまいが、一土豪平均三〇名程度でしかない。しかもそれほど生産力の高くない山間盆地であつたから、家臣の城下集住が可能であつたとも考えられない。以上の諸点から殿屋敷を武家集落と解しても、その規模は微々たるものであろう。そしてまた同様なことが「町」についても言えよう。したがつて、宮園の場合と同様に上副城の戦略的重要性を考えてみねばなるまい。上副城の地理的位置は、駅館川の下流から侵攻する勢力に対する防衛というよりは、上流即ち豊後側の玖珠地方よりの侵入を迎撃する地点を扼している。豊前側が大友氏の侵攻に備えた拠点としては、竜王城や妙見城がある。この二城は二豊勢力の激突にはしばしばその名が出る城であり、規模も上副城とは比較にならない本格的な前進拠点である。上副城の役割は妙見城防衛の外郭を構成する出城的なものではなかつたろうか。

上副城の戦略的役割と共に、副の地理的条件も宮園の場合と同様である。山間の盆地で交換の必要性が大きかつたことが、市の発達を促した原因である。宮園の場合は城下集落と呼ぶにふさわしく、城址に隣接して町＝「兵部殿屋敷」があるのに、副では「城山」より離れて「町」が位置しているのは、上副城が戦略的重要性において一戸城に劣り、市発達の条件においてすぐれていることと関係がありそうである。そして市における重要な商品として鍛冶製品が考えられる。副には「町」に北接

して「大鍛冶屋」があり、刀槍鍛冶が存在していたことを知りうる。確証はないが大宇佐郡史論に記す了戒氏と「大鍛冶屋」とは関係があるかも知れない。同書によれば、後小松院の時了戒義行が大友氏から副の地を給されて、大副城に拠つて原口・五名・日岳・二日市等六ケ村の領主となつた。ところが寛正二年、落城して玖珠郡に走り、永正三年、再び副村に帰り、先祖の流れを汲んで了戒流の刀槍を作つたという。了戒氏の故地は大字副ではなく、原口の了戒部落だと思う。しかし、義宗は天文の頃、副越中守の家臣となり小山大和守と称していたというし、子孫は江戸時代に庄屋となり副氏を称したという。了戒氏が副氏を称するからには、副氏の姻族であつたであろう。また刀槍鍛冶であつたというから「大鍛冶屋」と結びつく可能性が強いと思う。了戒部落から副の「大鍛冶屋」に移つたのではあるまいか。もし移転したならば、副部落は「大鍛冶屋」に隣接しているので、覚正寺支坊の大永二年銘の六地蔵を寄進した副大和守は小山（了戒）大和守である可能性が見出される。

以上の諸点を要約すれば、宮園や副の旧状がどのようなものであつたかは、数百年を経過した今日知るよすがもないが、城主が共に小土豪であつたため、規模は小さく形もととのつてはいなかつたにしても、城下集落の形成を示す小字名が存在しているのは、両地が共に戦略的に重要な地点であつたことと、山間の盆地で交換の必要性が高かつたことによるものであるということができよう。